

【 論 文 】

家族が要介護高齢者の観光体験に与える影響

The impact of family on the tourism experience of the elderly in need of care -

景 梅 (JING MEI) *

【 要 旨 】

高齢化が進行する日本において、観光業の活性化には介護が必要な高齢者の観光促進が重要である。本研究では、要介護高齢者の観光体験における家族の役割とその影響に焦点を当て、インタビュー調査を実施し分析を行った。まず、家族のサポートと役割を検討し、次に家族の在り方、最後に外部施設とサービスおよび予想しない影響について考察した。分析の結果、家族による心身のサポートと役割が極めて重要な要素であり、家族の余裕と思い、高齢者のニーズの理解、積極的な関与、柔軟な対応、良好な関係性の蓄積が要介護高齢者の観光体験を豊かにする鍵であることが明らかとなった。また、家族は観光体験を通じて外部施設やサービスの有用性および介護に関する新たな知見を得ていることも確認された。さらに、家族の積極的な関与によって実現した観光体験が次の観光体験の推進力となり、延いては地域経済や観光業の活性化につながる可能性が示唆された。

キーワード：要介護高齢者、観光体験、家族の役割、家族が与える影響、観光促進

第1章 はじめに

観光は高齢者の心身のリフレッシュや社会参加の機会を提供し、生活の質を向上させる役割を果たすが、要介護高齢者にとっては多くの制約¹が存在する。要介護高齢者は体力が低下し、何らかの持病を抱えるようになり、やがて健康への不安から旅行を控えるようになることは少なくない（水野, 2012; 秋山, 2010）²。要介護高齢者が観光を楽しむためには、普段介護施設に入所している人を除いて、暮らしを共にしている家族の支援が不可欠となる。日本の65歳以上の高齢者人口は増加傾向にあり、2023年12月の調査で3622万人、総人口に占める割合は29.1%となり、4人に1人が高齢者という時代を迎えた³。そのうち、要介護認定者は690万人となり、約5人に1人が介護認定を受けた人となっている⁴。介護認定までに至らなくても何らかの介助が必要な高齢者も含む要介護高齢者が観光を楽しむための支援が一層重要な課題となっている。観光市場においては、これらの高齢者の観光促進は新たな潜在的な市場規模の機会になる（Alen,

* 和歌山大学大学院観光学研究科博士後期課程

¹ 体力低下や持病（身体的制約）、バリアフリーの不備（環境的制約）、認知症（認知的制約）、旅行不安（心理的制約）、経済的負担（経済的制約）、介護家族の時間的余裕のなさ（時間的制約）などがある（水野, 2012; 大橋, 2012; 国交省, 2016; 安本, 2017; 久保田ら, 2020）

² 掛江, 2015, p.5.

³ 2023年12月1日現在日本の総人口は1億2429万9千人、65歳以上人口は3622万5千人というデータを基に筆者が計算したものである。出所：総務省統計局のホームページ <https://www.stat.go.jp/data/jinsui/new.htm>

⁴ 要介護（介助）認定者数は2022年3月現在690万人となっていた。出所：厚生労働省2021年度介護保険事業状況報告（年報）のポイントから引用 https://www.mhlw.go.jp/topics/kaigo/osirase/jigyo/21/dl/r03_point.pdf

2012, p.129-166)ため、その社会的・経済的意義が広く探求されている。そして足腰に不安がある人や車いす利用者が安心して旅行できるバリアフリー対応の工夫(国交省, 2016, p.6)や、身体が衰えても旅行できる環境を整えることによって、高齢者がもっと旅行に行ける可能性があるとも言われている(掛江, 2015, p.5-15)。

デイサービスの利用者を対象とした研究では、旅行支援時の緊急対応や介護支援・連携の重要性が指摘されており(小倉ら, 2008, p.27)、要介護高齢者の外出意欲を引き出すためには移動手段が重要であることが強調されている(三好ら, 2009, p.7)。また、家族にとって要介護者の観光体験の実現がさらなる喜びに繋がり(秋山ら, 2013, p.119)、介護家族が認知症の人と共に旅行することの意味として「思い出作り」や「家族の結びつきの再構築」(大橋, 2012, p.77)が挙げられている。このように、高齢者、要介助者と家族、移動弱者、観光困難者層等を対象とした観光の実態と意識(水野, 2012, p.16-27)、観光機会の拡大(安本, 2017, p.97)、ユニバーサルツーリズム(竹内, 2019, p.23-31)等に関する研究が数多く行われてきた。だが、要介護高齢者が観光を楽しむ際に家族が果たす役割やその影響については十分に研究されていない。

筆者は家族に高齢者がおり、彼らとの旅行や日帰りの観光を計画・実行した経験がある。また、高齢者の介護施設での勤務経験や要介護高齢者の家族との交流を通じて多くの体験や感想を聞くことができた。要介護高齢者は一人で観光に行くことが難しく、また見知らぬ人と一緒に観光に行くことを好まないため、家族の存在が重要である(水野, 2013, p.28)。要介護高齢者の観光促進において、家族が果たす役割や与える影響は大きいと考えられる。

以上のことから、要介護高齢者の観光体験における家族の影響についての研究は、要介護高齢者の観光促進に寄与するのみならず、観光産業全体の活性化にとっても非常に意義深いものである。

第2章 先行研究のレビュー

安本(2017, p.97)は、民間企業とNPOの協力によって移動弱者が個々の嗜好に応じたサービスを提供されることで、観光への参加機会が拡大すると提案している。米谷ら(2017, p.201-213)は、高齢者や障がい者などの移動弱者を対象に、生活の質的向上を図る手段としての観光を実現するためには政府の制度整備が必要であるとしつつ、一人ひとりの嗜好や身体状態に対応するためには民間企業やNPOの協力が不可欠であると指摘している。久保田ら(2020, p.103-111)は、旅行会社と地域支援組織の連携の重要性を強調し、ユニバーサルツーリズムの発展におけるこれらの役割を論じている。秋山ら(2013, p.123-124)は、旅行事業者を対象としたアンケート調査やユニバーサルモニターツアーの参与観察を通じて、要介護高齢者を含む観光困難階層の日常生活における楽しみと外出の重要性を強調し、観光事業者の社会貢献の側面を指摘している。

このように、既存の研究では要介護高齢者の観光体験に対する多角的なアプローチが試みられている。その中には、特に介助者や家族に言及した研究がいくつか存在する。例えば、秋山ら(2013, p.123-124)の研究では、サポーター(介助者)が旅行できることに対する喜びを明確

に意識していることを示したことで、家族にとっては要介護高齢者の観光体験の実現がさらなる喜びに繋がると考えられる。水野（2012, 2013）は、要介護者の旅行を阻害する要因や要介護者とその家族との旅行実態および旅行に対する意識を分析し、要介護者との旅行が心身に良い影響を与えるという認識が広まっていることを明らかにしている。また、旅行を親孝行と捉える一方で、旅行の実現には設備やサービス、情報の不足が障害となっていることを指摘し、これらの改善を提言している。さらに、前述した通り大橋（2012, p.77）は、介護家族が認知症の人と旅行をすることが「思い出作り」や「家族の結びつき」の再構築の機会になると指摘している。

これらの先行研究からは、要介護高齢者の観光が健康効果や家族間のコミュニケーションの促進に寄与し、観光先の物理的・サービス面の問題点を明らかにしていることが多く見られる。共通する点として、観光が高齢者の生活の質を向上させる重要な手段であるとの認識、政府・民間企業・NPOの協力や連携の不可欠性であることが挙げられる。一方で、支援の主体や具体的な影響分析に関しては研究ごとに異なっている。米谷ら（2017, p.201）は制度整備を強調し、安本（2017, p.97）は民間企業とNPOの具体的な取り組みに焦点を当てている。久保田ら（2020, p.109）は旅行会社と地域の支援組織の連携に焦点を当て、秋山ら（2013, p.124）は旅行事業者の視点から社会貢献の重要性を強調している。

以上のことから、要介護高齢者の観光体験における家族の役割や影響に関する理解が不足していることがわかる。多くの研究が制度や外部支援の必要性に焦点を当てている一方で、家族がどのように関与し、その関与が観光体験にどのような影響を与えるかについての研究は限られている。

本研究は、このギャップを埋めるべく、要介護高齢者の観光体験における家族に焦点を当て、家族が要介護高齢者の観光体験に与える影響を明らかにすることを目的とする。具体的には、次の三点について検討する。第一に、家族のサポートや役割が要介護高齢者の観光体験の実現にどのように影響しているか。第二に、観光体験の実現における家族の在り方は何か。第三に、外部の観光施設やサービスが要介護高齢者と家族の観光体験にどのように影響しているかを明らかにする。これにより、家族がどのように関与して要介護高齢者の観光体験が実現されているかについての新たな知見を提供する。

第3章 研究手法

要介護高齢者と家族の間の複雑な相互作用は、定量的方法では捉えきれないことが多い⁵。本研究では定性的アプローチを採用し、事例に基づくインタビュー調査から分析を行う。要介護高齢者とその家族が経験する観光体験には複雑性と個別性が多く含まれているため、家族の役割や観光体験のコンテクストを詳細に捉えることが重要である。このアプローチにより、新たな理論的洞察を得るだけでなく、要介護高齢者の観光体験の多様性と個別性を包括的に理解できると判断した。その理解からみられる現象を解釈するものとする。具体的な手法として、まず知人の

⁵ 量的研究方法は数値データを用いて客観的且つ再現性の高い現象を測定し、統計的に分析するに適しているに対して、質的研究は観察やインタビュー等で対象の経験・意識・感情・関係等の深い洞察が得られる。

紹介および伊勢志摩バリアフリースターセンターとの協力を通じてインタビュー対象者の選定を行い、半構造化インタビューを用いて対象者との対面または電話で対象者から詳細な情報を収集した。インタビューは対面または電話で行い、スマートフォンのレコーダーを用いて録音し、録音データを文字起こしして詳細な分析を行うために逐語録として記録した。得られたデータはコーディングを通じてテーマ別に整理し、関連するカテゴリーを抽出して分析を行った。

第4章 調査結果

第1節 調査概要

本研究におけるインタビュー対象者の選定プロセスは、複数の段階を経て行われた。初期段階では、旅行会社やトラベルヘルパーを提供する企業への協力要請を試みたが、これらの企業からの協力は得られなかった。しかし、知人の紹介により伊勢志摩バリアフリースターセンターとの接点が確立され、同センターからの協力を得ることができて、本調査が実現できた（図表1）。

図表1 調査概要

調査地	東京及び滋賀県大津市
調査日	2023年8月5日（A～D 家族）、8月26日（E 家族）
調査方法	半構造化インタビュー（下記調査項目に対応する大まかな質問だけを準備）を対面及び電話で行った
調査対象者	要介護高齢者と家族との観光体験を実現した家族（要介護高齢者2名と家族となる5名）
調査対象者の選定	65歳以上の介護認定を受けた高齢者及びその家族の中からインタビューに積極的だった5家族
調査項目	観光体験の経緯、家族の役割やサポート、家族の介入、外部サービス等
記録	事前許可を得てスマートフォンのレコーダーに録音し、全内容を忠実に逐語録として書き起こした。調査方法及び録音に対して同意が得られた者を対象とした。
分析	インタビューの記録から研究目的に関わると考えられる部分を抜粋し、コードごとに整理した。コーディングして得た内容を図表1にまとめ、関連するカテゴリーを抽出して要約した。なお、逐語録を整理した内容を一部抜粋したものとA家族が作った旅行プランを文末に添付する。

出典）筆者作成。

伊勢志摩バリアフリースターセンターは、2008年に国土交通省から「第一回バリアフリー化推進功労者大臣表彰」を受賞しており、その信頼性と実績は本研究の対象者選定において重要な要素であった。当センターの協力により、6名の潜在的な対象者が紹介されたが、このうち3名と直接インタビューを実現した。その後追加の2名とインタビューを実施することができ、合

計5つの家族(A家族～E家族)のインタビューが成立した。この対象者選定プロセスでは、要介護高齢者の家族に対して研究の趣旨を丁寧に説明し、適切な回答を得る必要があった。特に伊勢志摩バリアフリーツアーセンターとの協力により、実際に観光体験を実現した家族の具体的な観光体験に関する情報を収集することが可能となった。調査対象の選定には限界が存在するものの、得られたデータは要介護高齢者の観光体験に関する洞察を提供し、本研究の目的を達成するには十分なものである。

本調査は、東京及び滋賀県大津市において、2023年8月5日と26日に行われた。調査方法としては、半構造化インタビューを採用し、対象者との対面または電話によるインタビューを実施した。インタビューの所要時間は対象者により異なったが、大体1時間から1時間半程度であった。調査項目には、観光体験の経緯、家族の役割やサポート、家族の介入、外部サービスなどが含まれている。インタビューは参加者の同意のもと、スマートフォンのレコーダーを使用して録音され、その後、全内容を逐語録として忠実に書き起こした。そして、インタビューの記録から研究目的に関わる部分を抜粋し、コードごとに整理した。その結果を基に関連するカテゴリーを抽出し、要約した。本研究はその語り（発言）を理解し、その実態からみられる現象を解釈するものである。

第2節 調査対象者

A 家族

インタビュー対象者：aさん（娘）、女性、東京都調布市在住

要介護高齢者本人：tさん、男性、神奈川県小田原在住

年齢：70代

介護度：要支援2

身体状態：脳腫瘍による認知症、末期

旅行同行：奥さん、娘さん家族

広島への旅行時期：2019年7月

詳細：認知症がさらに進行する前に、旅行を通じての両親への恩返をしたく、両親の好きだった広島を選んだ。入念に旅行プランを作成した、旅行に不安だった母に丁寧に説明することで、実現した。観光先に事前にメールで問い合わせをした時、車椅子の利用が可能であることを確認できたことや、ロープウェイを利用した時に管理人等のサポートを受けたことでスムーズだったという。参考までに当時の旅程表を本人の承諾を得て、文末に添付する。

その後：ありえないと思われていた地元の祭りに行けた。また近場への旅行に出かけることもできた。のちに要介護状態になった母親をホテルのディナーショーに連れていく自信にもつながった。

B 家族

インタビュー対象者：yさん（本人）、

yさん（娘）、女性、東京都内在住

要介護高齢者本人：yさん：女性、女性、神奈川県横浜在住

年齢：70代

介護度：要介護3

身体状況：糖尿病の合併症による脊髄小脳変性症で歩行困難、電動車椅子

旅行同行：旦那さん、娘さん

伊勢志摩への旅行時期：2022年4月

詳細：親子でよく話し合って旅行先を決める。娘さんは神宮に行ったことあるけど、両親は行ったことないということで、連れていった。手配はすべて娘がした。

その後：新幹線や飛行機を利用して墓参りのため東北に行った。ジンギスカンを食べることが楽しみで北海道への旅行も実現した。以前利用したホテルで宿泊した。本人は娘と一緒に行くので、安心で、気が楽と思っていた。

C 家族

インタビュー対象者：yさん（娘）、女性、東京都内中心地在住

要介護高齢者本人：hさん、女性、東京都品川区在住

年齢：70代

介護度：要介護4

身体状況：パーキンソン病、車椅子、記憶力低下

伊勢志摩への旅行時期：2021年12月

詳細：旅行の問い合わせがあったのは、対象者の娘婿。義母に対して、とても親身に旅行の相談をして、楽しい旅行になるための算段を入念に計画していたという。

その後：箱根、京都への旅行も実現している。

D 家族：

インタビュー対象者：fさん（本人）

要介護高齢者本人：fさん、男性、東京都新宿区在住

年齢：70代

介護度：要支援2

身体状況：脊髄損傷で下半身不自由、車椅子

伊勢志摩への旅行時期：2022年4月

旅行同行：夫婦

詳細：はじめての伊勢神宮参拝希望。旅行の先に伊勢志摩を選んだ理由は、戦前か戦中かぐらいに自分の両親が伊勢志摩へ新婚旅行に行って、二見興玉神社で写真を撮っている、そのアングルと同じ写真を撮りたいということで旅行しに行った。

その後：伊勢志摩の旅行を機に、北海道、沖縄の宮古島、さらに北海道と、夫婦で最後の旅行になるだろうという旅行を何度もした。

E 家族

インタビュー対象者：h さん（息子）、男性、滋賀県大津市在住

要介護高齢者本人：h さん、男性、滋賀県大津市の特別養護老人ホームに入所中

年齢：80 代

介護度：要介護 3

身体状態：認知症、すり足

旅行同行：息子

京都へ行った時期：2023 年 8 月

詳細：初めて、知人に頼んでレンタカーを借りて、親を金閣寺に連れていった。金閣寺では車椅子を借りて休憩を取りながら移動。長く歩けない状態だったが、金閣寺の前あたりでは車椅子を降りて 50 メートル程歩けたことに驚いていた。

その後：公園やショッピングモールにも数回行けた。機会があればまた旅行したいという気持ちになっていた。

第3節 倫理的配慮

訪問調査にあたっては、事前に趣旨の説明や承諾を得て、半構造的質問を伝えた上で、実際に対面して録音の承諾を得たあとに行った。また、事前に録音の了承を得て電話インタビューも実施した。さらに調査対象者の語りは研究に使用する許可も得ており、本研究の成果に関係者に開示することも約束している。

第5章 調査結果の分析と考察

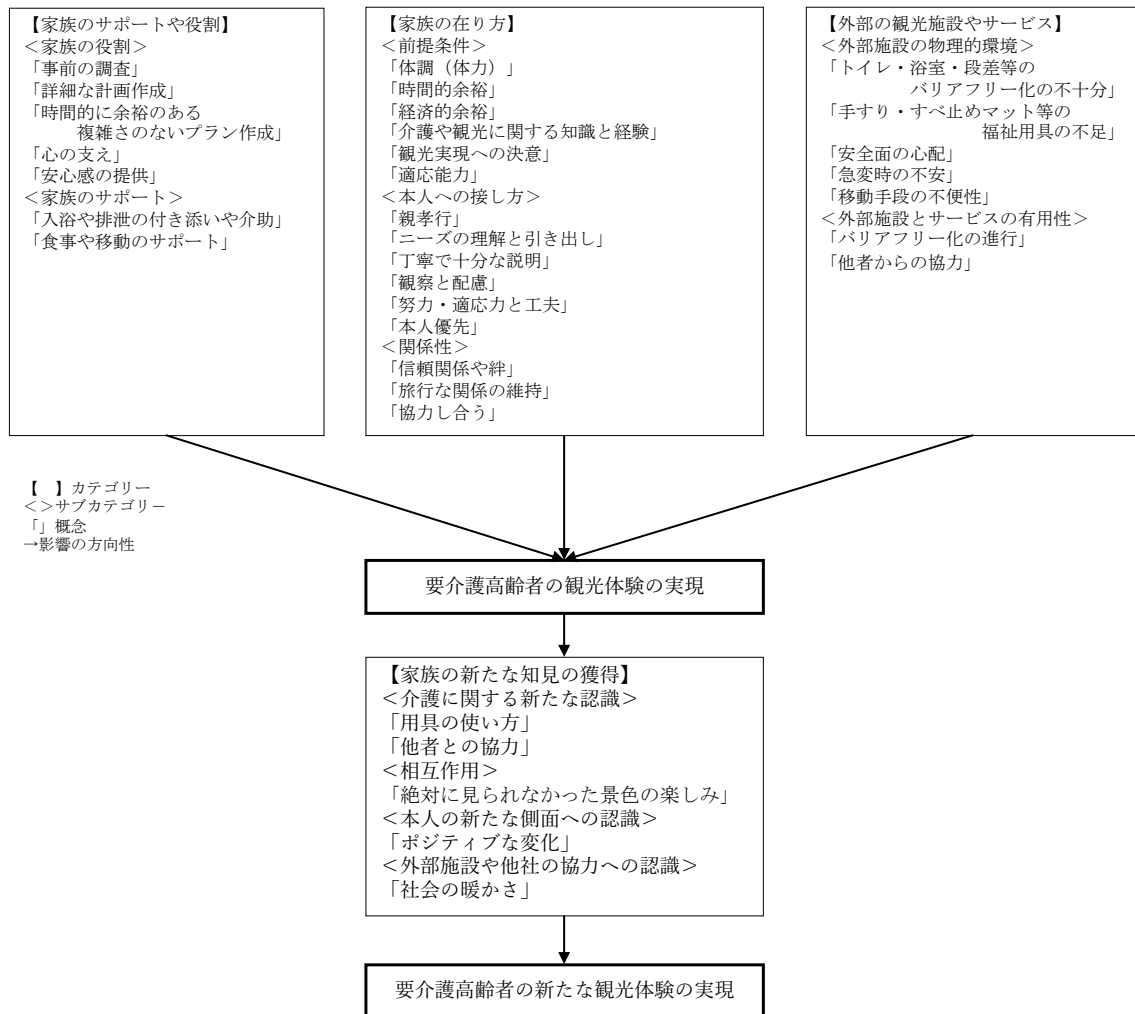
第1節 調査結果

インタビュー調査の結果について、本研究の目的に関わると考えられる項目について抜粋、整理、分析した。家族が観光体験の実現における様々な影響等を図表 1 に示すこととする。

第2節 家族のサポートと役割が観光体験に与える影響

要介護高齢者の観光体験は、健常者とは異なり、特別な配慮と支援が必要である。本節では家族のサポートや役割が観光体験に与える影響について述べる。旅行プランの作成にあたり、A 家族の a さんは、「誰にも頼れないから自分で準備した」「事前にマツダミュージアムにメールで確認した」と述べており、また「母親が心配性だから早朝は嫌がるので、地元の駅を 9 時半に出発し、広島を 11 時に出て地元へ 3 時 19 分に到着するゆったりしたプランを立てた。母親が安心するために早めに帰るプランにした」と述べている。さらに、「宮島のお祭りがあることに気づいてプラン変更を行った」とも語っている。H 家族の h さんも、「金閣寺に行き、その後ご飯

図表2 家族が要介護高齢者の観光体験に与える影響（結果図）



出典）筆者作成。

を食べて帰るというシンプルなプランを立て、余裕を持った計画をした」と述べていた。これらの発言は、家族が高齢者の体調や状況に合わせ、事前に必要な情報を収集し、観光地や施設について調査し、無理のない詳細な計画を立てて、高齢者の不安を軽減し、安心感を与えていたことを示している。B家族のyさんは、「旅行会社に頼むと細やかなことを聞いてもらうのが申し訳なくて、母親の症状に合わせてバリアフリールームを予約するのも自分でやっている」と述べており、家族の努力と工夫が高齢者の観光体験において重要な役割を果たしていることを示している。D家族の本人は「詳細に調べて時間に余裕のあるプランを作るし」と語り、E家族も、事前に観光地のバリアフリー状況を調査し、必要な手配を行うことで、高齢者が快適に過ごせるよう工夫していることを語っている。A家族のaさんは、「お風呂に関しては男の子とパパが入れてくれるから安心」と述べ、C家族のyさんは「家族がいるから安心して一緒に行ける」と述べており、家族が高齢者の心の支えとなり、安心感を与え、旅行中の不安や緊張を和らげる役割を

果たしている。家族が細部にわたる準備を行い、高齢者の快適さと安全を確保するための努力を惜しまないことで、旅行の成功に繋がっていると考えられる。

インタビューした5家族のうち4家族は非同居であり、非同居の高齢者が観光を経験する際、同居の家族介助者の不安感が顕在化した。A家族のaさんは「介助者の母が不安だった。母の心配は人ごみや乗り換えに関するもので、迷惑をかけたくないと考えていたので、心配なところをクリアするプランを立てた」と述べ、C家族のyさんは「行先を調べて、日程を説明している」と語っている。これは、事前の調査と詳細な計画作成や丁寧な説明により、高齢者の不安を大幅に軽減したことを示している。また、非同居家族が要介護高齢者との観光を実現することは、家族間の結びつきにも役立っていると考えられる。

家族のサポートは、観光中の排泄や入浴に関しても重要である。例えばA家族のaさんは「男の子とパパが(お風呂)入れてくれるから安心」、B家族のyさんは「母と私の二人なので浴室も一緒に行ける」、E家族のhさんは「同性だから父のトイレの見守りもできる」と述べており、D家族の本人も「家族の存在は大きい」と語っていたのは、家族が観光のプロセスにおける入浴やトイレ介助等のサポートをしていた現れである。

このように、要介護高齢者の観光体験は特別な配慮と支援が必要であり、家族のサポートと役割は極めて重要な要素である。家族が高齢者のニーズを考慮し、余裕を持ったスケジュールを組み、食事や移動のサポートを行いながら心の支えとなることで、要介護高齢者の観光体験はより充実したものとなる。家族のこれらのサポートと役割が、要介護高齢者を安全で充実した観光体験へと導いており、家族の影響は大きいと言える。

第3節 家族の在り方

本節では観光体験を支える家族の在り方について分析する。C家族のyさんは、「私が2泊か3泊すると体力が持たない。夜に何度もトイレに起きるので、大変」と述べており、家族の体調・体力が観光活動をサポートする上で重要な要素であることの現れであった。B家族の娘yさんは、「コロナ禍で時間ができ、旅行に行くようになった。リーズナブルに旅行できるよう格安航空を利用した」と述べ、E家族のhさんも「ボーナスがあったので金閣寺に連れて行った」と語っている。これらの発言は、時間的・経済的余裕が家族の観光活動において必要不可欠な要素になることを示している。

A家族のaさんは、「広島には行けていなかったが、病気を克服できるかもしれないと思い、退院したら旅行に連れて行くことを決断した」と述べており、観光体験の実現への強い決意が見られた。

観光プランについても、A家族のaさんは「誰にも頼れないから自分で作った」と述べ、B家族の娘yさんは「旅行会社に頼むと細かなことを聞いてもらうのが申し訳ないので、すべて自分で手配している」と語っている。E家族のhさんも「遠くまで行けないのでツアーを申し込みず、一つの場所にしてレンタカーで行った」と述べていることから家族が個人旅行を選択していることが確認された。これにより、家族の認識が要介護高齢者の観光体験の内容に影響を与える

ことがわかる。

C家族のyさんは「宿泊したホテルは介護ベッドではないが、高さがちょうど良く、工夫して対応した」と述べており、障害や介護に関する知識と経験によって要介護高齢者のニーズを把握し、適切なサポートを提供していた。家族は観光活動において予期せぬ課題にも直面することがあり、例えば、C家族のyさんは「京都の寺院の砂利道で長時間の移動が疲労や痛みの原因となり、無理せずホテルに滞在した」と述べている。このように家族は状況に応じて適切な判断を行い、観光体験を実現している。

A家族のaさんは「小さい頃いろいろなところに連れて行ってくれたので、恩返しとして旅行に連れて行きたい」と述べており、旅行を親孝行と捉えていることの現れである(水野,2013,P31)と同時に、親孝行の精神が家族の動機付けとなっていると考えられる。この感謝の気持ちは、高齢者に対する思いやりや配慮を深め、観光体験を充実させる要素となる。

C家族の発言にあるように、記憶力が低下した母親に対して旅行前に詳細な行程を説明し、その日その日の活動や訪れる場所を何度も具体的に丁寧に伝えることで、高齢者の不安を軽減し、安心感を提供していた。認知障害を抱える高齢者にとって、新しい環境や体験に対する不安を軽減するためには、事前に十分な情報を提供することが重要である。E家族のy発言からも、すり足で移動する父親の体調を観察し、必要に応じて休憩を取る、安全面を考慮して対応する姿勢が見られた。

A家族のaさんは「2人とも広島が好きだったので病気になる前は年に3,4回は遊びに行っていた」、C家族のyさんは「青森は私の父のお墓があるので、毎年もしくは二、三年に一回行っている。帰ってきたらデイサービスの人たちに観光に行ったことを話すのが楽しみで、またリハビリに励んでしまう」と述べており、家族が高齢者との思い出作りや墓参り等のための観光は、要介護高齢者にとって精神的な支えとなっている。また、C家族のyさんの「青森旅行はいつも同じホテルに泊まるが、そこはバリアフリーではないが馴染みがあるので安心できる」という発言等から、要介護高齢者は同じ観光先や宿泊施設を利用することが多く、馴染みや安心感を重視する傾向にあることが示されている。さらに、B家族のyさんのように、家族が高齢者の症状や好みに応じてバリアフリールームを予約するなど、細部にわたる手配を行うことで、高齢者の安心感が高まり、観光体験の質が向上する。C家族の発言にも見られるように、家族が高齢者の希望や意見を最優先に考え、旅行先やアクティビティを選定することで、高齢者の満足感が高まり、旅行への参加意欲が向上する。接し方において、本人のニーズの理解と引き出し、きめ細かなプラン作成と十分な説明は、高齢者の不安や疑問を取り除くための手段として極めて有効である。観察と配慮、工夫と努力、本人優先の姿勢も観光活動をスムーズかつ有意義に進めるための重要なアプローチである。

家族と高齢者の関係性も観光体験に大きな影響を与えていた。A家族のaさんの「小さい時にいろいろなところに連れて行ってくれたので、恩返しとして旅行に連れて行きたい、親孝行したい」は、家族と高齢者の間に深い信頼関係と絆が築かれていることを示している。良好な関係の維持も重要であり、家族が高齢者のニーズに応じた計画を立てることで、信頼関係がさらに強固

なものとなり、高齢者は安心して観光を楽しむことができる。B 家族 y さんの「平坦な道は母に電動車椅子で移動してもらい、人込みの多い場所や段差があるところは私が介助する」というように、高齢者と家族の協力関係が観光体験をより良いものにしている。このように、家族と高齢者の信頼関係や絆と相互作用は高齢者が安心して観光を楽しむための基盤となり、家族の親孝行したいという想いが観光体験の実現の動力になっている。

以上のように、家族の余裕と想い、高齢者のニーズの理解、積極的に関与、柔軟な対応、良好な関係性の蓄積等の在り方が要介護高齢者の観光体験を豊かにする鍵となっていることが明らかになった。

第4節 外部の観光施設やサービスと予想外の影響

要介護高齢者の観光体験には、家族だけでなく他者や外部施設の協力が不可欠であり、さまざまなサポートが求められる。観光地の具体的な物理的環境は高齢者の体調や体験に直接的な影響を及ぼしていた。例えば、C 家族の場合、京都の寺院周辺の砂利道での長時間の移動が高齢者にとって疲労や首の痛みの原因となったことから、その後の観光地選びを再考し、ホテル滞在を中心としたプランから、砂利道のような困難な地形を避け、温泉を中心とした観光地を優先するように変更した。E 家族も、金閣寺での観光時に階段が障害となり、平坦な観光地を選ぶようになった。これらの事例は、家族の認識が観光地選びにおいて変化し、より適切な環境を選ぶようになったことを示している。

観光活動中に予期せぬ事態が発生することも多い。家族の発言からは、バリアフリー化の不十分さ、人手の必要性や夜中の排泄介助による睡眠不足などの困りごとが多く確認された。特に、トイレや浴室の段差問題、手すりやすべり止めマットの不足は安全性に直結する問題として指摘されている。家族にとって移動手段の不便性や急変時の不安も高齢者特有のリスクとして認識されている。

観光活動において、外部施設やサービスの利用により、家族は高齢者がより快適に旅行を楽しむための具体的な方法を学んでいた。例えば伊勢神宮では NPO 法人のスタッフや地域のボランティア団体が特別なガイドとして介助サービスを提供している。ここを訪れた要介護高齢者はその協力を得ることで、伊勢神宮の砂利道をスムーズに移動できた。また、A 家族の a さんは、高齢者の移動による負担を軽減するために水上バスを利用し、普段は見られない景色を楽しむことができた。これにより、家族と高齢者の相互作用が観光体験を豊かにし、充実感を得ることができた。またロープウェーの乗り降り時に、他者からの協力を得たり、観光先で車椅子が借りられること、優先的に入り口やトイレの近くに案内されたことを知り、家族は社会の温かさを感じ、次の観光体験への動力となる。この経験が高齢者の観光体験にポジティブな影響を与えることを示している。

観光活動中に予期せぬ事態が発生した際、家族は宿泊施設や駅員・空港スタッフからの支援を得ていた。これは、家族だけでは対処しきれない状況に直面した時、他者の支援が有効であるとの認識を反映している。このような経験を通じて、家族は「介護に関する新たな認識」を形成し、

観光関連施設や他者（ボランティアを含む）による支援が存在することを理解するきっかけとなる。介護に関する新たな認識は、家族が介護を提供する過程で直面する多様な課題とその対処方法に関する理解の変化を指す。観光活動中に予期せぬ事態が発生した際、家族は既存の日常生活における介護の枠組みを超えて対処する必要がある。この状況下で、家族は宿泊施設のスタッフや駅員、空港スタッフなど日常生活では接点のない他者からの支援を受け入れることになる。これは、家族が介護の提供において、外部の資源やサポートを活用することの有効性を認識し始めたことを示している。この経験は家族に「介護に関する新たな認識」をもたらし、介護が単に個人や家族内で解決すべき問題ではなく、より広い社会的な支援システムと連動していることを理解するきっかけとなる。この認識は、介護を取り巻く社会環境が家族のみに責任を負わせるのではなく、地域社会や公共施設、ボランティア団体など、多様なアクターの協力によるサポートシステムへと変化していることを反映している。

B 家族の yさんは「電動車椅子にしてから移動しやすくなった、電動車椅子になってから遠くまで行けるようになった」と述べており、移動手段の改善が高齢者の外出意欲を高めることになっていたため、三好ら（2009,P7）が指摘した移動手段があることが外出の意欲に繋がることが確認された。また、行動範囲も広げられ、観光にも行けるようになったことは、生活の質も上がったと考えられる。

観光後、積極的な行動に繋がる効果も見られた。例えば、A 家族の tさんは「観光から帰ってすぐに孫と一緒に地元の祭りに行った」と述べている。C 家族の hさん「次の旅行のためにリハビリに励んだ」と語っていた。また、B 家族の yさんや C 家族の hさんは、観光後に通っているデイサービスで誇らしげに観光の話をしており、E 家族の hさんも介護施設の他の入所者に楽しそうに話していた。これらの事例は、観光体験が高齢者にとって世代間の交流や精神的な刺激となり、次の観光への意欲を高めることを示している。

前述の通り、調査対象者の観光体験後の状況を整理すると、家族の積極的な関与が次の観光体験の推進力となっていることが明らかになった。例えば、A 家族は地元の祭りや近場への旅行を実現し、娘の aさんは「のちに要介護状態になった母親をホテルのディナーショーに連れていく自信にもつながった」と述べている。B 家族は新幹線や飛行機を利用して墓参りのために東北に行き、ジンギスカンを食べるために北海道へ旅行し、C 家族は箱根や京都への旅行を実現していた。D 家族は北海道美瑛や沖縄の宮古島など、夫婦で最後になるだろうという旅行を何度も実行したという。

以上のように、要介護高齢者と一緒に観光体験をすることで、本人は新たな観光へのモチベーションを獲得し、家族は外部施設やサービスの有用性、介護に関する新たな知見を得ることができる。家族の積極的な関与によって実現した観光体験が、次の観光体験の推進力となることが示されている。

第6章 おわりに

本論文は、要介護高齢者の観光活動における家族の影響を明らかにすることを目的に、インタ

ビュー調査を用いた定性的アプローチを採用している。まず、家族の役割やサポートが観光体験の実現に与える影響を抽出し、その後、家族の在り方を分析した。分析の結果、「前提条件」、「本人への接し方」、「関係性」に関する具体的な知見が得られた。また、外部施設やサービスが要介護高齢者の観光実現に与える影響についても検討を行った。最終的に、家族が観光体験に積極的に関与することで、新たな知見が得られ、それが次の観光体験の実現につながるということが明らかになった。

要介護高齢者の観光体験は、健常者とは異なり、特別な配慮と支援が必要であるため、家族が高齢者の体調や状況に合わせて外部環境に関する情報をいかに獲得するかが重要である。具体的には、観光地や施設の情報を入念に調べ、事前にバリアフリー化された宿泊施設や移動手段などの必要な情報を収集し、無理のない詳細な計画を立てることが求められる。さらに、観光活動においての身体介護や安心感を与える精神的サポートが、観光体験のすべてのプロセスにおいて大きな影響を与えることが明らかになった。

家族の「体調（体力）」、「時間的余裕」、「経済的余裕」は高齢者との観光体験の実現に不可欠な要素であり、観光や介護に関する知識と経験は、要介護高齢者のニーズを的確に把握し、適切なサポートを提供するための基盤である。家族の決意と親孝行の精神は行動の原動力として影響しており、良好な関係性の蓄積が観光体験の成功の鍵であることが確認された。

また、観光体験を通じて、家族は要介護高齢者の能力や制約を深く理解するだけでなく、「介護や観光に関する新たな知見」を形成することがわかった。これには、家族が介護に関する新たな認識を得ること、外部施設やサービスの有用性を理解すること、自分たちでは利用しない観光サービスを通じて新たな景色を楽しむこと、他者からの協力を通じて社会の温かさを感じるということが含まれる。これらの知見は、次の要介護高齢者の観光体験を実現するための新たな動力となる。

家族の積極的な介入により、要介護高齢者の観光体験は、単なる活動から家族間の結びつきや世代間の交流、生活の質の向上を促進する重要な機会へと変化する。そして、家族が要介護高齢者と観光体験を実現することで、外部施設やサービスの利用が増加し、延いては地域経済や観光業の活性化につながる可能性が示唆された。水野（2013, p.26）の研究では、自家用車を利用した個人旅行が多いことが確認されたが、今回の調査では新幹線や飛行機、レンタカーなどの公共交通機関が多く利用されていた。要介護高齢者の観光を促進し、観光産業の活性化に寄与するためには、外部施設やサービスの問題点に関するさらなる検討が今後の研究課題となる。

【謝辞】

本研究に関するインタビューや情報提供をしてくださった家族の皆様へ深く感謝申し上げます。

【参考文献】

Alén, E., Domínguez, T., & Losada, N. (2012). New opportunities for the tourism market: Senior tourism and accessible tourism. In M. Kasimoglu (Ed.), *Visions for global tourism industry*.

- Creating and sustaining competitive strategies* (pp. 355-372). IntechOpen. <https://www.intechopen.com/chapters/35523>
- 秋山哲男、大西康弘、佐藤貴行. (2013). 観光困難階層にとってのユニバーサルツーリズム. *観光科学研究*, 6, 111-125.
- 江見和明. (2019). 介護旅行サービスの普及に関する現状と課題: ソーシャル・イノベーションの視点から. *消費経済研究*, 8, 118-130.
- 大塩まゆみ、奥西栄介. (2018). *高齢者福祉 (第3版)*. ミネルヴァ書房.
- 大塚泰司. (2016). 要介護高齢者の観光体験: 日本人高齢観光客の研究. *旅行研究*, 55(3), 45-60.
- 大橋美幸. (2012). アクセシブルな観光: 介護家族が認知症の人と共に旅行する意味. *函大商学論究*, 45(1), 71-82.
- 小倉毅、須貝静、小倉譲. (2008). 高齢者のサポート旅行に関する研究(1). *中国学園紀要*, 7, 21-30.
- 掛江浩一郎. (2015). 国内旅行市場拡大の可能性: 身体が衰えても旅行できる環境整備. *国土交通政策研究所報*, 55, 23-35.
- 株式会社スターコンサルティンググループ. (2020). 要介護高齢者に対する旅行支援の在り方に関する調査研究事業. 令和元年度唐人保健事業推進費等補助金老人保健健康増進等事業. <https://www.s-cg.co.jp/news/744/> 最終閲覧日: 2023年9月15日
- 観光庁. (2014). ユニバーサルツーリズムの普及・促進に関する調査(報告書). <https://www1.mlit.go.jp:8088/common/001226048.pdf> 最終取得日: 2023年9月20日
- 喜多一馬、池田耕二. (2020). 地域リハビリテーションとしての温泉旅行の可能性を探る: 事例研究. *医療福祉情報行動科学研究*, 5, 77-85.
- 久保田美穂子、鈴木一寛. (2020). ユニバーサルツーリズムの発展に向けた考察ー旅行会社と地域の支援組織の連携についてー. *日本国際観光学会論文集*, 27, 103-113. https://www.jstage.jst.go.jp/article/jafit/27/0/27_103/_pdf/-char/ja 最終取得日: 2024年1月10日
- 厚生労働省. (2021). 介護保険事業状況報告書. https://www.mhlw.go.jp/topics/kaigo/osirase/jigyo/21/dl/r03_gaiyou.pdf 最終取得日: 2023年9月20日
- 国土交通省. (2016). 車いす、足腰が不安なシニア層の国内宿泊旅行拡大に関する調査研究. <https://www.mlit.go.jp/pri/kouenkai/syousai/pdf/research-p160518/10.pdf> 最終取得日: 2023年10月1日
- 島川崇 (編). (2020). *観光と福祉*. 成山堂書店.
- 竹内敏彦. (2019). ユニバーサルツーリズム促進に向けた考察ー旅行業者の意識改革とその実践ー. *日本国際観光学会論文集*, 26, 91-99.
- 内閣府. (2022). 令和4年版高齢社会白書(全体版). https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2022/zenbun/04pdf_index.html 最終取得日: 2023年9月30日
- 内閣府. (2023). 令和5年度版高齢社会白書(全体版). https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2023/html/zenbun/s1_2_2.html 最終取得日: 2024年6月5日
- 中溝一仁. (2018). 余暇としての「旅」の持つ意味: 高齢者の「旅行・観光」に関する質的調査から. *応用社会学研究*, 24(3), 56-70.

- 水野映子. (2012). 要介護者の旅行を阻害する要因: 介護者を対象とする意識調査から. *Life Design REPORT*, 7, Summer, 23-33.
- 水野映子. (2013). 要介護者の旅行の実態と介護者の意識. *Life Design REPORT*, 4, Winter, 45-55.
- 三好理恵、浅川典子、橋本志麻子、高橋龍太郎、須田木綿子、西村昌記、出雲祐二. (2009). 要支援・要介護高齢者の楽しみに関する研究. *埼玉医科大学看護学科紀要*, 3(1), 1-8.
- 安本宗春. (2017). 福祉水準を上昇させる手段としての観光: 移動弱者に対する観光参加機会の拡大. *日本国際観光学会論文集*, 24, 91-99.
- 柳銀珠. (2014). 日本の高齢者にとって観光が持つ意味: 旅行商品の提供側と観光者側の観点から. *観光研究*, 26(1), 23-32.
- 米谷光正、安本宗春. (2017). 生活の質的向上の手段としての観光: 観光から見る福祉. *東北福祉大学研究紀要*, 33, 201-210.

【 Abstract 】

In Japan, where the aging population is advancing, promoting tourism for elderly individuals requiring care is crucial for revitalizing the tourism industry. This study focuses on the role and impact of family involvement in the tourism experiences of elderly individuals requiring care, conducted through interviews and analysis. First, the study examines the support and role of family members, then the family dynamics, and finally, the external facilities and services as well as unexpected influences. The analysis reveals that the physical and emotional support provided by family members is a crucial element, and the family's resources and intentions, understanding of the elderly's needs, proactive involvement, flexible responses, and accumulation of good relationships are key to enriching the tourism experiences of elderly individuals requiring care. Additionally, it was confirmed that families gain new insights into the usefulness of external facilities and services as well as caregiving through these tourism experiences. Furthermore, the proactive involvement of families in realizing these tourism experiences serves as a driving force for future tourism activities and potentially contributes to the revitalization of regional economies and the tourism industry.

資料：A 家族広島三泊四日間旅行スケジュール

広島旅行：7月18日(木)～21日(日)			
18日(木)	19日(金)	20日(土)	21日(日)
小田原発新幹線で広島へ ANAクラウンプラザホテル	原爆資料館～マツダミュージアム 宮島～みや離宮宿泊～管絃祭	宮島観光 みや離宮宿泊	宮島発フェリー～平和記念公園 広島駅発新幹線で小田原へ
9時27分 秦野発(8時45分あきら・高)	7時00分 朝食	6時30分 宮島神社参拝 朝食	7時00分 朝食
9時48分 小田原着	広島平和記念資料館(8時半～)	9時00分 宮島観光 弥山ロープウェイ (送迎バスは9時45分～)	8時40分 世界遺産航路フェリー 宮島発～平和記念公園着
10時08分 小田原発ひかり507号	11時00分 ホテルチェックアウト		9時30分 船上から原爆ドーム タクシーでJR広島駅へ
11時17分 名古屋着	昼食 広島駅五丁目お好み焼き11時00分	昼食	10時00分 広島駅着 休憩・買い物
11時33分 名古屋発のぞみ105号	タクシーor JR12時40・50分 広島ZOOMスタジアム前終由		10時50分 広島駅発のぞみ126号
↓ 車内で昼食	13時00分 JR向洋駅徒歩5分 マツダ本社1階受付(12時15分まで) マツダミュージアム	みやじマリン水族館	↓ 車内で昼食
13時50分 広島駅着	15時00分 タクシーで15分広島港へ移動	15時00分 特別室へ移動	13時10分 名古屋着
タクシー 広島城 カープギャラリー	15時30分 広島港到着	お風呂 干物	13時26分 名古屋発ひかり526号
ANAプラザホテルチェックイン 4人部屋+2人部屋 広島電orタクシーで カープギャラリー(～16時) 平和記念公園	17時00分 フェリー25分で宮島へ みや離宮海側部屋チェックイン 干物	お風呂 屋形船?	↓ 小田原到着
お風呂	お風呂	17時55分	14時35分 小田原発
18時30分 夕食:ホテルL.ストラン	18時30分 夕食	18時30分 夕食 部屋食	14時58分 小田原到着
中継料理・レストラン予約済み	管絃祭	カープファンクラブ	↓ 秦野到着